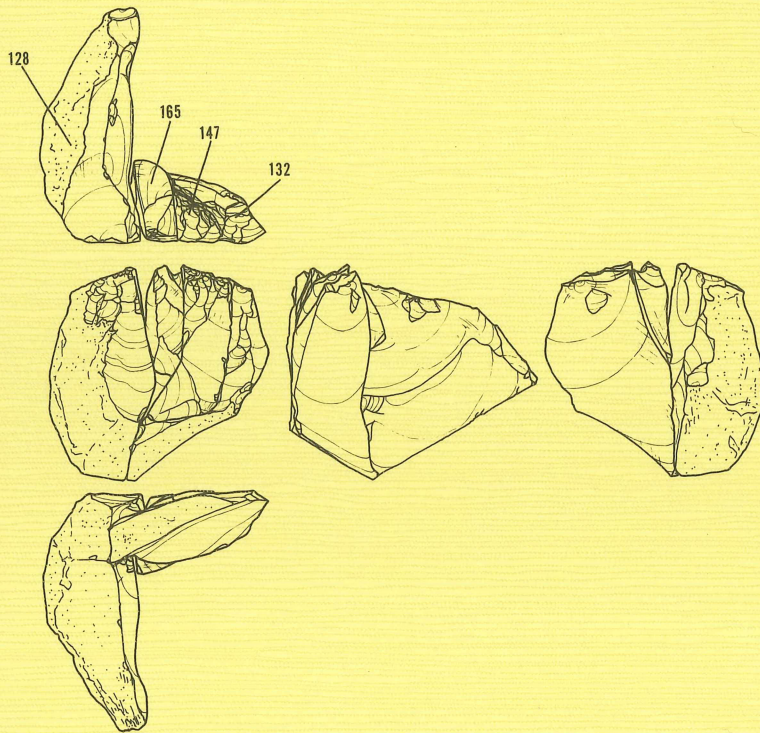


浜津ヶ池遺跡



1996. 3

長野県中野市教育委員会

中野市埋蔵文化財発掘調査報告書

浜津ヶ池遺跡

1996. 3

長野県中野市教育委員会

はじめに

浜津ヶ池遺跡は昭和20年代、当地方の考古学の先達である神田五六氏によって発見され、昭和30年代にいたり、金井汲次氏によって旧石器時代の遺跡であることが確認されたという長い研究史をもち、古くから、学会に知られた遺跡でありました。さらに、近年の考古学の発展により、数少ない今から約2万5千年以上も昔の旧石器時代遺跡であることが明らかにされつつあります。

今回の調査は浜津ヶ池の水辺環境整備事業に伴う事前調査であります。出土層の確認、遺跡の広がり等についての貴重なデータを得ることができました。

本調査報告書が、少しでもこれからの考古学や歴史の解明に役立つと同時に、市民の皆様の学習や研究の資料になれば幸いです。

最後になりましたが、本調査にご協力いただいた関係各位および地元市民の皆様にあつく御礼申し上げます。

平成8年3月

中野市教育委員会教育長 小林治己

例 言

1 本調査報告書は長野県北信地方事務所の委託を受けて、中野市教育委員会が実施した浜津ヶ池水辺環境整備事業にともなう埋蔵文化財の事前調査報告書である。

2 発掘調査は中野市文化財保護審議会会長金井汲次氏の指導のもと、市学芸員および調査員関武が中心となって実施したものである。

目 次

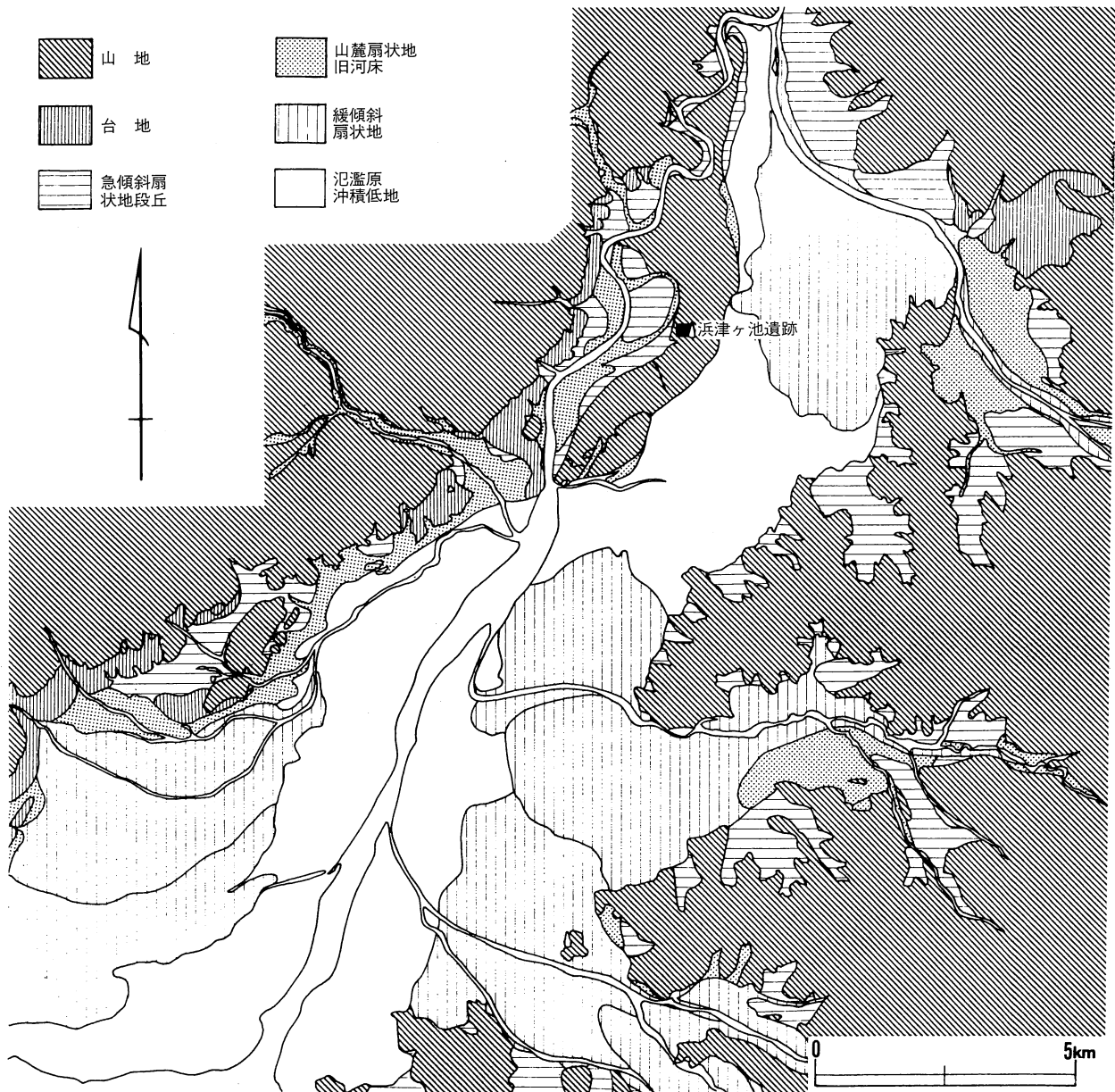
第1章 位置と立地	3
第1節 位置	3
第2節 立地	7
第3節 層序	7
第4節 研究略史	8
第2章 調査成果	9
第1節 調査	9
第2節 遺物の集中地点	9
第3節 石材分布のあり方	11
第4節 遺物	11
第3章 浜津ヶ池遺跡出土の石器群の分析	11
第1節 分析の方法	11
第2節 石器の形態分類	18
第3節 素材剥片剥離	21
第4節 形態の組み合わせ	26
第5節 まとめにかえて	26

第1章 位置と立地

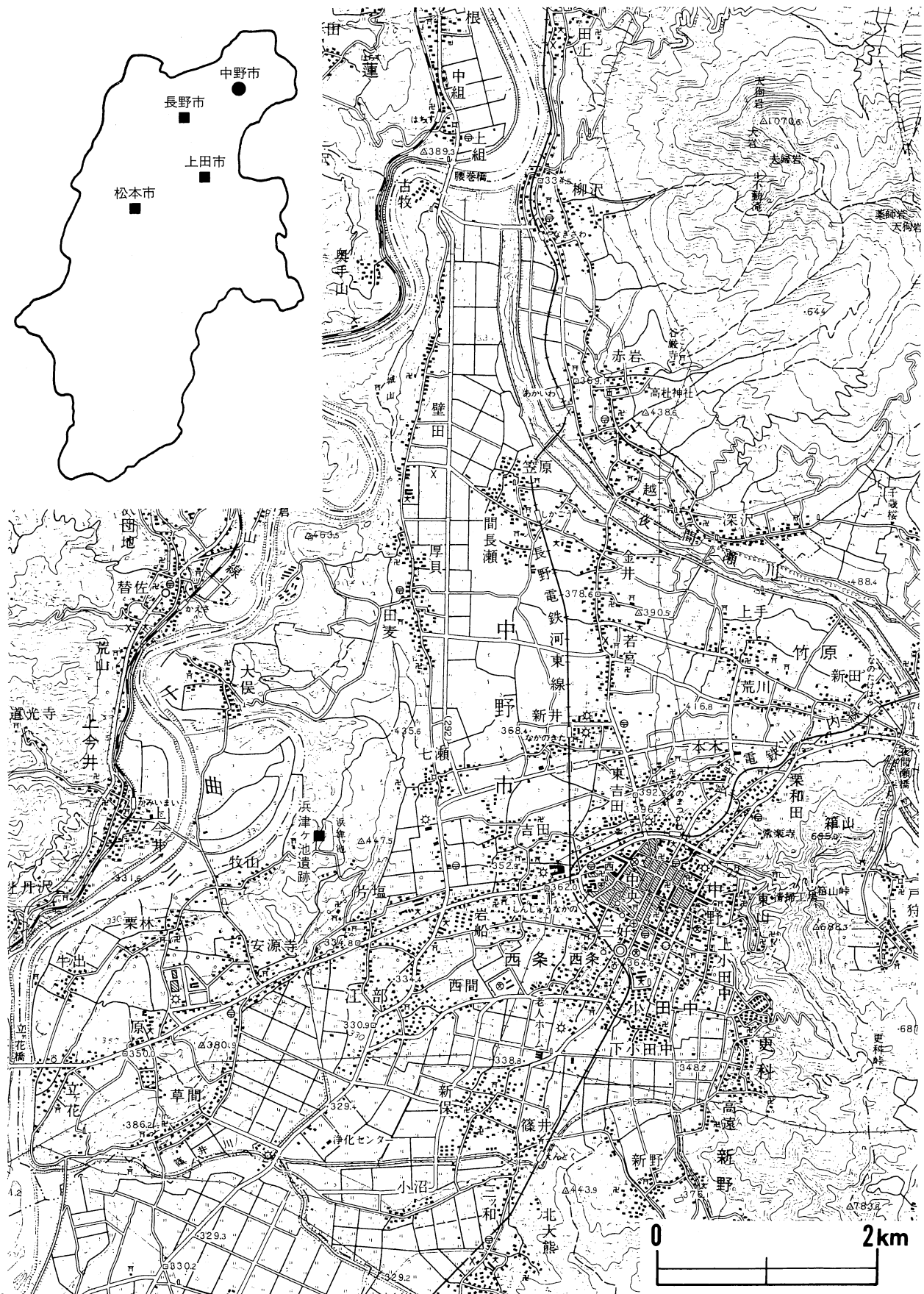
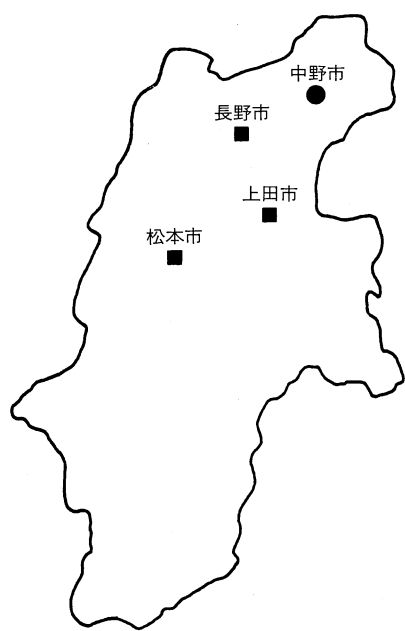
第1節 位置

浜津ヶ池遺跡は長野県中野市大字栗林字大池平に位置する。中野市は長野盆地の北端、盆地が収束する部分にあたる。中野市の地形は市の西縁部を画すと同時に長野盆地の北西縁部を形成する高丘丘陵、長丘丘陵、長野盆地の沖積面（盆地部）、長野盆地の東縁を画する河東山地とそこから流下する河川によって盆地部に形成された扇状地からなる。

長野盆地の北西縁部は西部山地とそれに続く丘陵地帯（高丘丘陵はこの丘陵地帯の東縁、長野盆地の沖積面と接する部分にある）からなる。西部山地の頂部は平坦な地形をなし、前期更新世に形成された準平原と考えられている。また、丘陵地帯は長野盆地の軸方向と同じ、南東から北東方向に並ぶ二列の丘陵群に分けられ、西部山地寄りに南から豊野、赤塩、奥手山丘陵が並び、その東側に南郷、高丘、長丘丘陵が並ぶ。西部山地寄りにある丘陵ほど比高、規模とも大きく、西に高い階段状の地形をなし、基盤となる地質も古い傾向を示している。盆地部とは



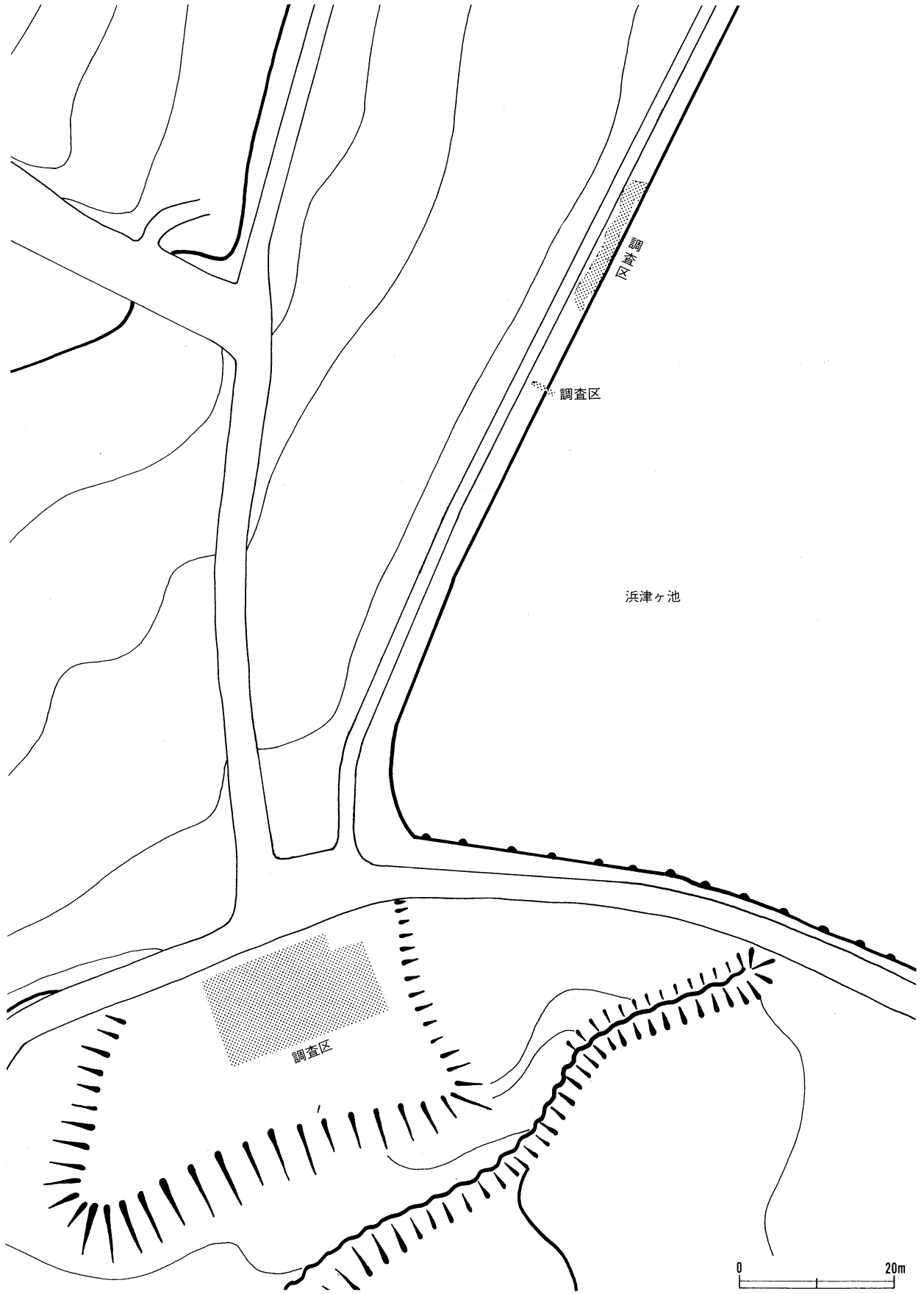
1図 遺跡の位置（その1）



2図 遺跡の位置 (その2)



3 図 遺跡の立地



4 図 遺跡の調査区

直接急峻な崖で接している。

遺跡の立地する長丘丘陵は高丘丘陵と連続し、長野盆地の北西端部を形成し、千曲川を挟んで西側の豊野、赤塩、奥手山丘陵へと続く。千曲川は先行性の河川で、丘陵が隆起する以前からの位置を現在も保っているものと思われる。

遺跡は連続して南東から北東に延びる長丘丘陵と高丘丘陵が接する部分にあたる。高丘丘陵は南に位置し、連続する長丘丘陵よりも標高が低い。

第2節 立地

遺跡は標高の低い高丘丘陵と長丘丘陵が接続する部分の標高の高い長丘丘陵の先端部分の丘陵鞍部に形成された小谷の斜面に位置する。

谷は北から南にむかってひらけ、やがて西に方向を変える。谷の奥行きは南北約1km、幅は約500mを測る。谷底と盆地底部との比高は約70mを測る。谷の奥、谷が始まる部分に湧水がある。

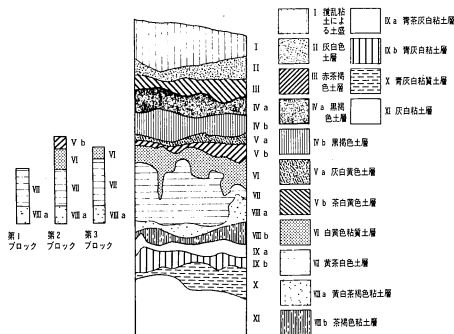
遺跡名からもわかるように、現在は谷を堰きとめて、灌漑用貯水池となっているが、遺跡の営まれていた時点では湿地か沼が形成されていたと思われる。

遺跡は谷の西斜面、浜津ヶ池の西岸に広がっているものと思われるが、今回調査した岸辺付近からより東側、池底にかけて広がっていると推測される。

第3節 層序

高丘丘陵の旧石器時代の調査は研究の緒についたばかりである。

そのため、旧石器時代遺物の包含層の統一的、考古学的な層序区分は行われていない。また信濃町周辺で認



5図 基本層序

められる比較的厚い火山灰層の堆積も本地域では認められない。

さらに、今回の調査区の層序は水成堆積と思われる、他地域との比較は更に困難にしている。

今回は色調や混入する粒子から、便宜的に次のように区分しておく。

- 1層：近年の道路改良工事による土盛り。黄色の粘土層。
- 2層：灰白色を呈し、直径0.2～1cm前後の赤黄色の粒子がブロック化したものが、斑状に混入する。
- 3層：赤黄色、茶褐色の粒子が主体となり、赤褐色土が混じる。
- 4層：黒褐色土層。粒子の密度によってa、b二層に細分できる。

a層は上層の粒子が沈殿し暗色化したものが斑点状に混じる。

b層は1～5mm程度の粒子がわずかに混入する。

縄文時代の遺物が含まれる。

- 5層：やや白色の黄色土層で、茶褐色および赤黄色の粒子を含む。色調と混入した粒子の大きさからa、b二層に細分できる。

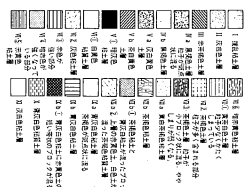
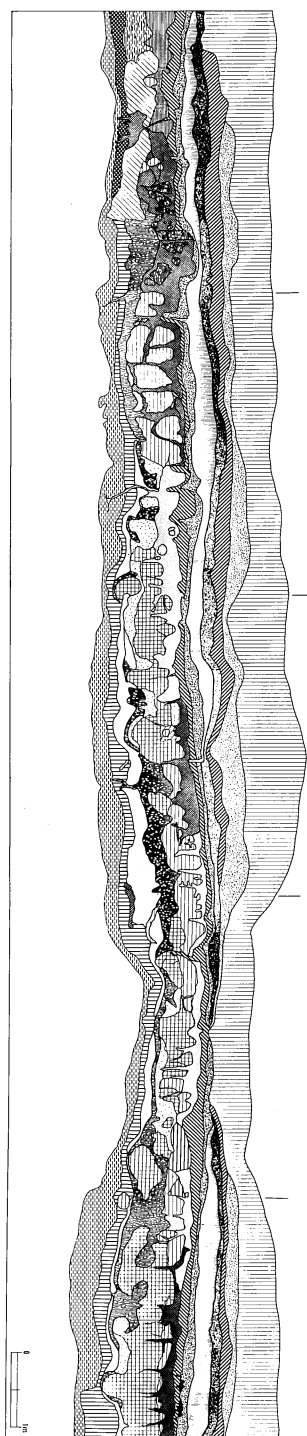
a層は上層の影響を受けてか、やや灰色味が強い。1～2mmの粒子が斑点状に混入する。

b層はわずかに茶色味が強く、1～5mm程度のやや大きめの粒子が混入する。

- 6層：やや白味がかかった粘質性の黄色土層で、調査区の中央から端にいくにつれて、暗赤色が強くなる。B5グリッドから南側では粘土質から粘土に変化する。

1～3mm程度の黄色と茶褐色の粒子がわずかに含まれる。また、クラック状を呈した灰色の粘土ブロックが含まれる。クラックは更に下層に発達して延びる。

- 7層：やや黄色と茶色味がある白色度で固くしまっている。



6 図

茶褐色粒子と赤黄色の粒子が含まれる。赤黄色の粒子は少なくなり、大きさも0.5～1mmほどになる。場所により密度の薄い部分と濃い部分がある。

また、茶褐色粒子はB5グリッド以南にいたると、短い縞状の斑点となる。

なお、本層の上部は大きなクラックが発達し、上層（第6層）がクラックの隙間に落ち込んでいる。

8層：茶味の強い褐色の粘土層で、上層（第7層）が小ブロックとなって混入するa層と全く含まれないb層に細分される。なお、a層の上面にクラックが認められる地点がある。

9層：青味の強い灰白色粘土で、上層（第8層）

が斑点状に含まれるa層とそうでないb層に細分される。b層には1～2cm前後の礫が含まれる。

10層：黄緑色がかった青灰色粘土。茶褐色の粒子（0.5～2mm前後）、赤黄色の粒子（0.5～2mm）がわずかに含まれる。上層よりも多くの小礫が含まれる。

11層：灰白色粘土層。ブロック状の赤黄色土が混入している。やはり、小礫が含まれるが上層よりも大きい。やや粘質が弱い。

第4節 研究略史

昭和20年代から、浜津ヶ池の西側一帯より黒曜石の石器が出土することが注目されていた。しかし、当時は旧石器時代が日本列島に存在しないと考えられていた時代であり、隣接する弥生時代遺跡である栗林遺跡に関連する石器製作遺跡であると考えられていた。

旧石器時代の存在が明らかになって間もない昭和30年代、金井汲次氏はこれらの黒曜石製石器が旧石器時代のものではないかと考えるにいたった。

おりしも、昭和35年（1960）、浜津ヶ池西側の農道改修工事が行われた。それに伴い、神田五六、金井汲次、高橋桂氏による発掘調査が実施された。地下60cmの茶褐色粘土層より、黒曜石製のフレイク等の石器、70点余りが出土した。遺跡の調査報告を担当した川上元氏は旧石器時代の終り頃、ナイフ型石器文化の最終末段階の石器群ではないかと指摘した（川上・1960）。

さらに、昭和62年（1987）、県営畑地帯総合土地改良事業に伴い、農道を挟んだ池の西側斜面を調査した。調査は畑灌漑用のスプリンクラー設置に伴うもので、調査区の幅が狭く、深さも80cmに制限されたものであった。

この調査では池の西側をかなりの面積にわたって試掘調査したような結果になったが、わずかに数点のフレイクを確認するにとどまった。

さて、近年にいたり、信濃町周辺の調査でAT層以下の石器群の存在、中野市沢田鍋土遺跡の石器群が知られるようになってから、浜津ヶ池遺跡の石器群も後期旧石器時代前半の石器群ではないかと考えられるようになってきている（関 1985）。

第2章 調査成果

第1節 調査

浜津ヶ池の整備事業は池の周囲の護岸と遊歩道の設置および駐車場の整備である。

調査は駐車場として整備される地点と池の周囲の護岸工事部分の内、これまでに多くの遺物が表面採集された池の南東部分を調査地点として選択した。

駐車場として整備される地点については、試掘トレンチを設定して調査したが、すでに工事により削平されており、遺物は出土しなかった。

池の南東部分の岸辺については調査の結果、極めて狭い範囲にも関わらず、遺物分布集中地点が三箇所確認され、総数350点余りの石器類を発掘した。

第2節 遺物の集中地点

第1集中地点

B7から8グリッドに位置する。240×100cm、厚さ約50cmの楕円形を呈する。遺物の集中の東側部分は攪乱により遺物包含層が失われている。

遺物の分布はさらに調査区の東側に延びているものと思われる。

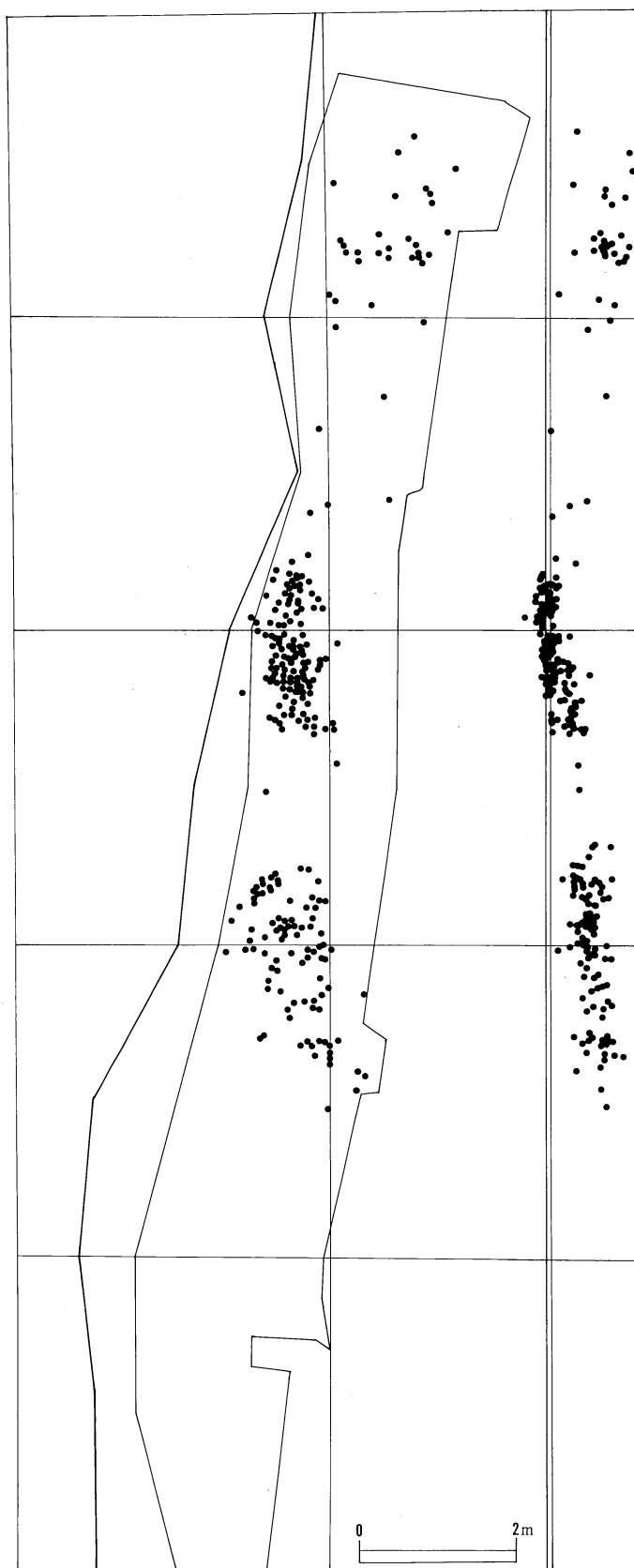
第2集中地点

B6から7グリッドに位置する。320×180cm、厚さ約60cmの楕円形を呈する。

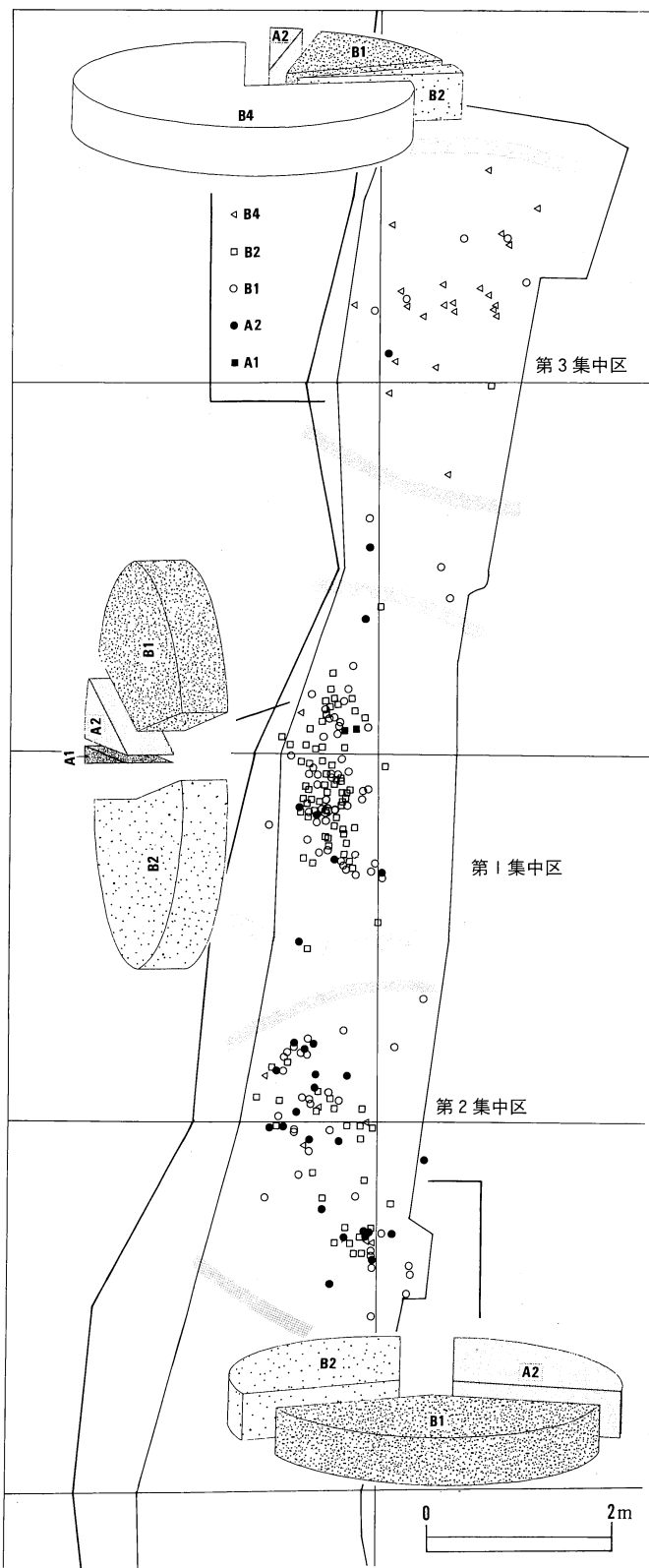
遺物分布は東西に若干広がるものと思われる。

第3集中地点

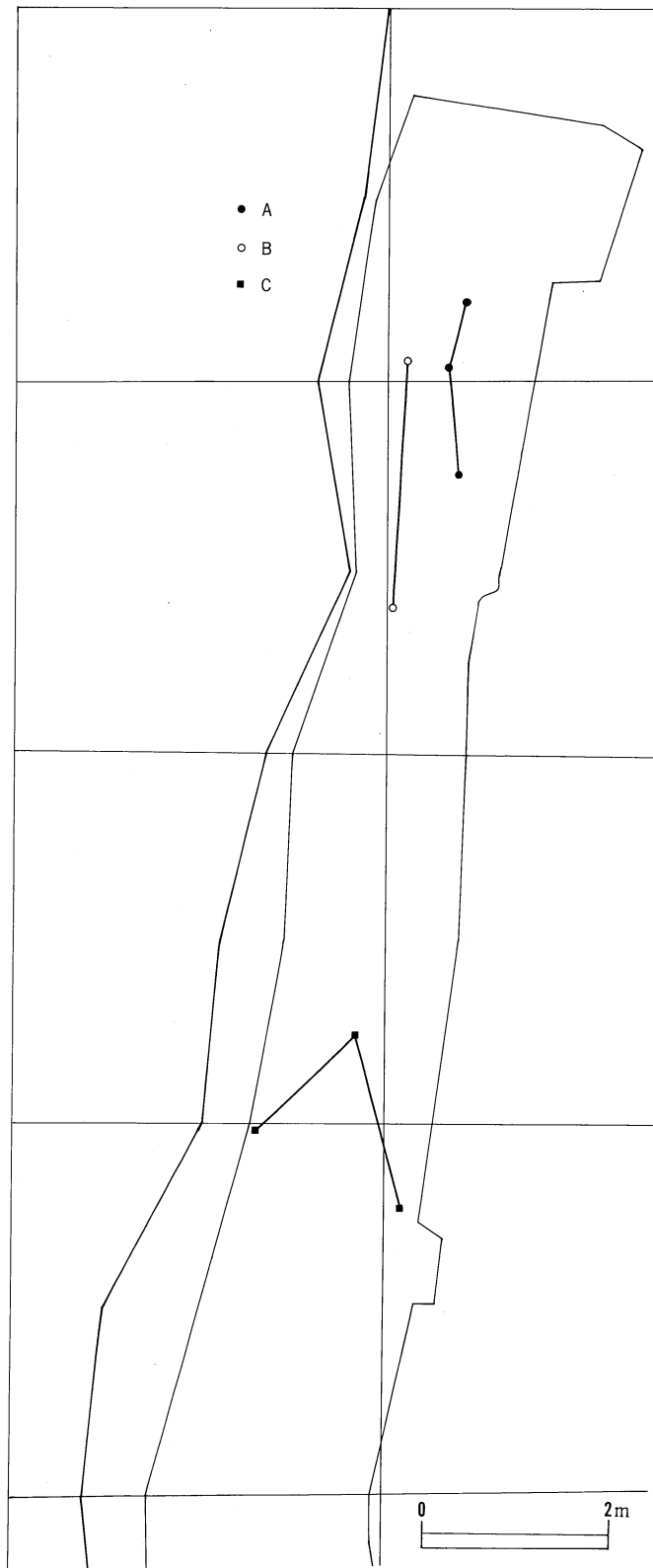
C8から9グリッドに位置する。280×120cm、厚さ約90cmの楕円形を呈する。



7図 遺物出土状況図



8 图 石材分布



9 图 石器接合平面图

第3節 石材分布のあり方

出土した石器の石材はチャートと黒曜石に大別される。黒曜石340点余りにたいしてチャートは4点と極めて数が少ない。

黒曜石については肉眼で更に細別を試み、都合2種類に大別し、さらに各々を5種類に分類してみた。それぞれA1、A2、B1、B2、B3、B4と呼称する。これらは、肉眼での分類であるために信頼度は高くないが、一応の目安と考えた。

Aは鉄分とされる茶褐色の部分をもつもの。

A-1：全体に茶褐色味の強い黒色。

A-2：透明な部分に茶褐色味の強い不透明部分が入りこむ。

Bは鉄分とされる茶褐色部分の含まれないもの。

B-1：透明部分に不透明な黒色部分が筋状に見える。

B-2：B-1と同様であるが、気泡が含まれる。

B-3：透明部分に強い黒色の縞状部分が含まれる。

B-4：光にかざすと黒色の霧がかかったように見え、白色の縞および気泡を含む。

うち、B-3は第2集中地点に1点確認されたが、出土位置が不明瞭のため、分析からは除いている。

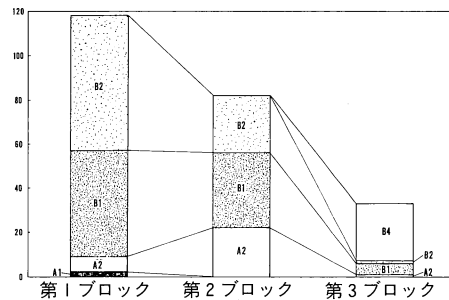
各集中地点に共通する石材とそうでない石材の二者がある。

量的には変動があるものの、A2、B1、B2は各集中地点に共通する石材である。一方、A1は第1集中地点に、B4は第3集中地点でのみ検出されている。

3集中地点とも、同じ石材を保有していることから、極めて近い時間帯に形成されたものと考えることができよう。

第4節 遺物

遺物は総数350点余り出土している。そのうち、



10図 各集中地点の石材

165点を図示した。図示しなかった遺物はの大半は1cmに満たない小さな剥片である。

石核、二次加工のある剥片、剥片が検出されている。一般に、二次加工とした剥離は極めて微細なものが多い。こうした微細な剥離は使用によっても十分に生じるものであり、意図的な剥離であるかどうか判断しがたいものも含まれる。

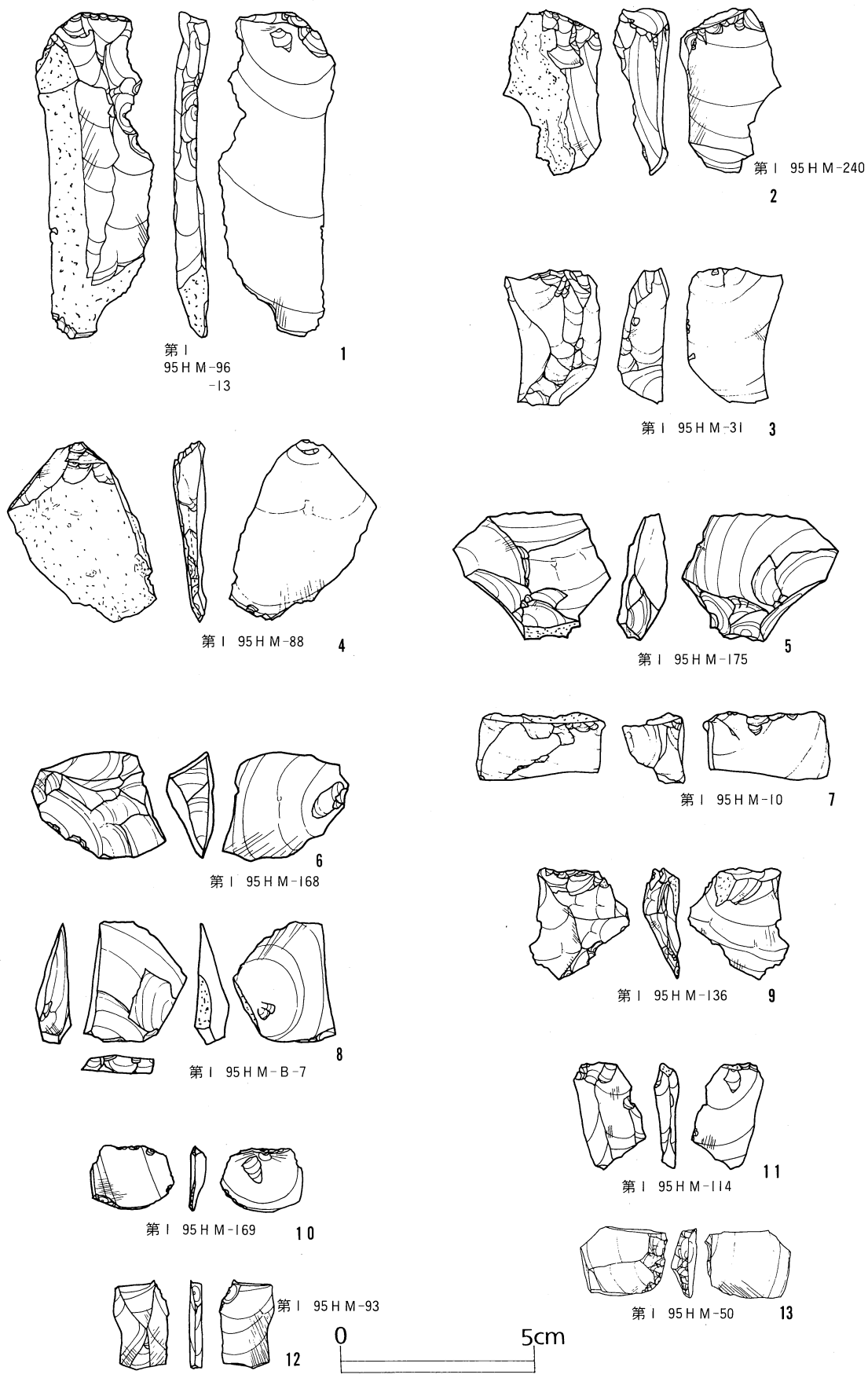
第3章 浜津ヶ池遺跡出土の石器群の分析

第1節 分析の方法

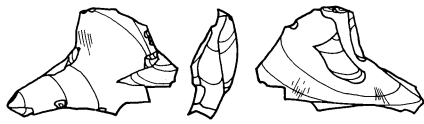
浜津ヶ池遺跡出土の石器群は台形様石器を含む石器群である。長野県下における同様の石器群には諏訪市ジャコッパラ8、同12、立科遺跡F地点、弓振日向遺跡、針の木平遺跡、貫ノ木B遺跡、野尻湖湖底立ヶ鼻遺跡などをあげることができる。また、近年、信濃町野尻湖周辺では台形様石器を伴う石器群の大規模遺跡が数遺跡発見され、その分析が進められている。

しかし、その数は決して多いとはいえない。そうした中で、浜津ヶ池遺跡の位置する高丘・長丘丘陵の南端部では、立ヶ花表遺跡、沢田鍋土遺跡、安源寺遺跡と台形様石器を含む石器群が狭いエリアに集中している。

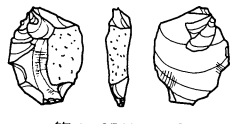
しかしながら、立ヶ花表遺跡、安源寺遺跡、沢田鍋土遺跡の一部（第1次調査）で検出された石器群は、調査といえども工事中のもので十分な記録が残されていないかたり、攪乱により出土状況が明確で



11图 出土石器·第 I 集中地点(I)



第 I 95HM-B-7 第 I 14



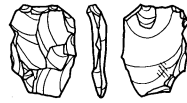
第 I 95HM-40 15



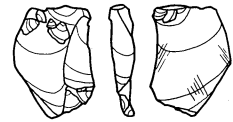
第 I 95HM-262 16



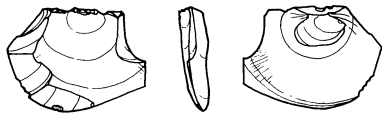
第 I 95HM-249 17



第 I 95HM-300 18



第 I 95HM-27 19



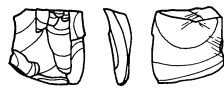
第 I 95HM-21 20



第 I 95HM-250 21



第 I 95HM-不明 22



第 I 95HM-16 23



第 I 95HM-48 24



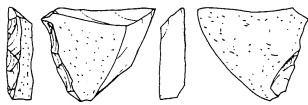
第 I 95HM-129 25



第 I 95HM-167 26



第 I 95HM-23 27



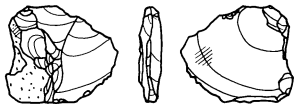
第 I 95HM-11 28



第 I 95HM-137 29



第 I 95HM-91 30



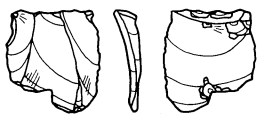
第 I 95HM-121 31



第 I 95HM-130 32



第 I 95HM-34 33



第 I 95HM-54 34



第 I 95HM-24 35



第 I 95HM-9 36



第 I 95HM-261 37



第 I 95HM-177 38



第 I 95HM-307 39



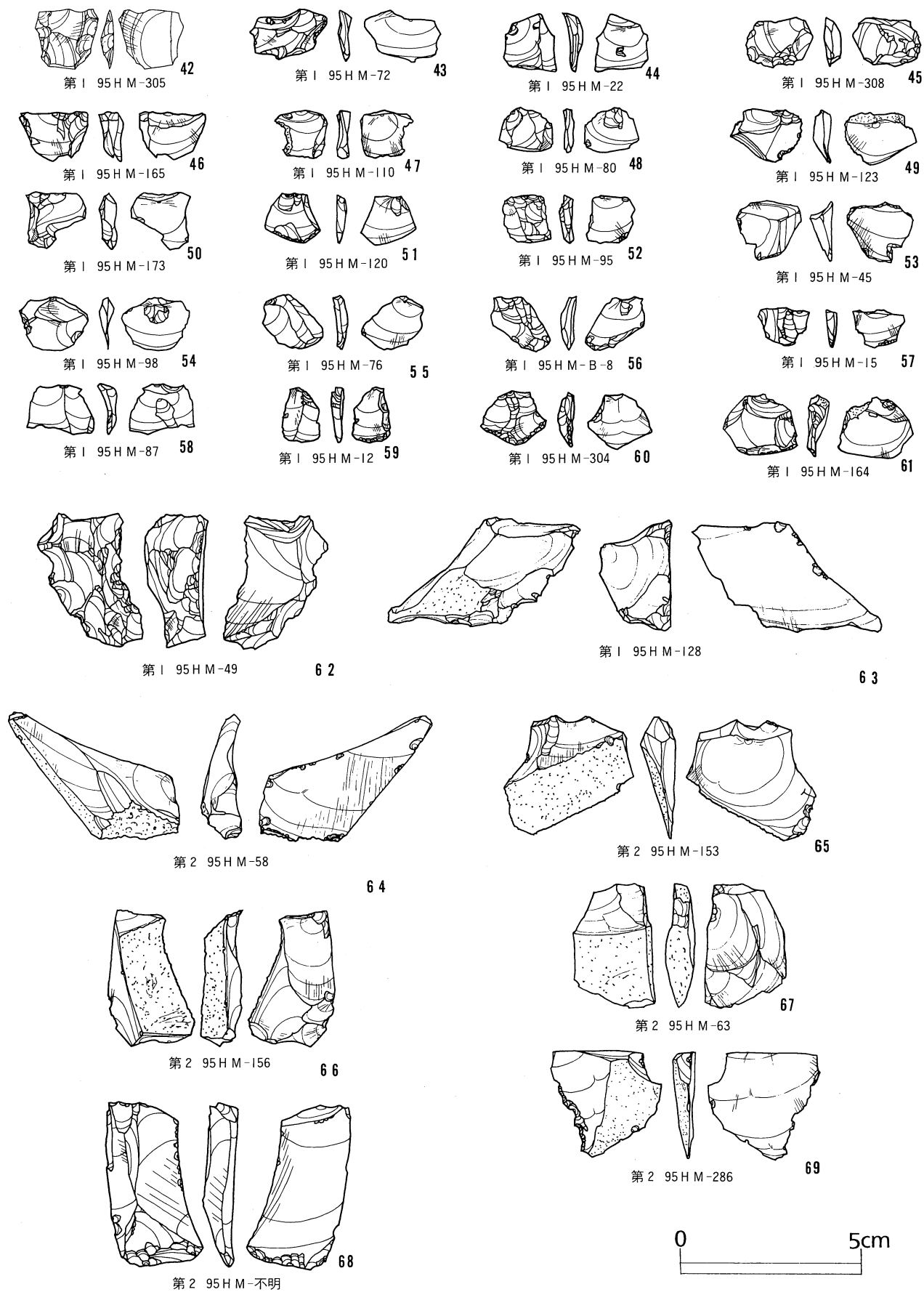
第 I 95HM-127 40



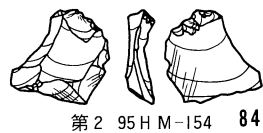
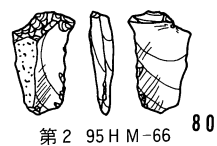
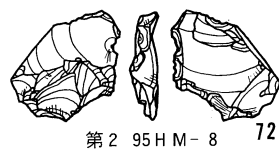
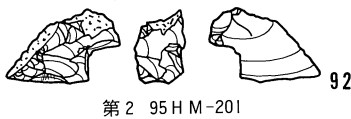
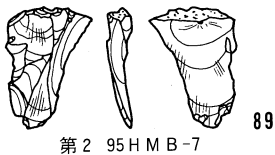
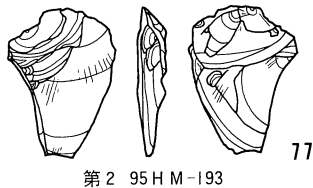
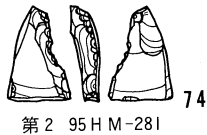
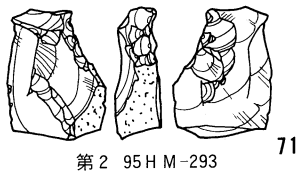
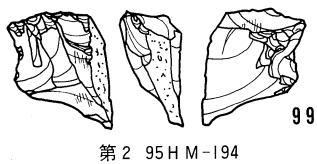
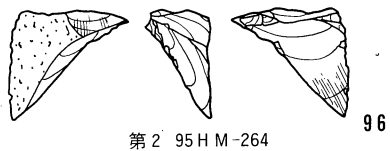
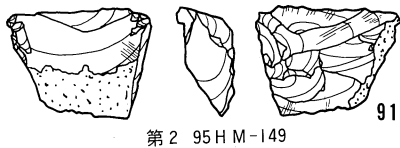
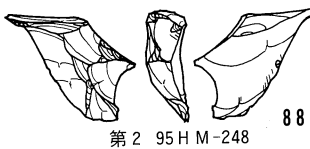
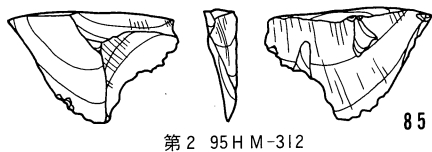
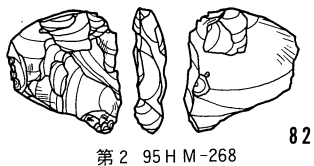
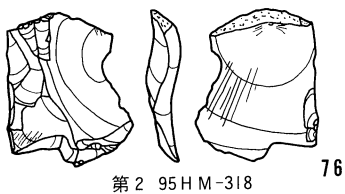
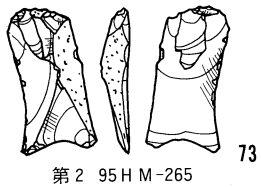
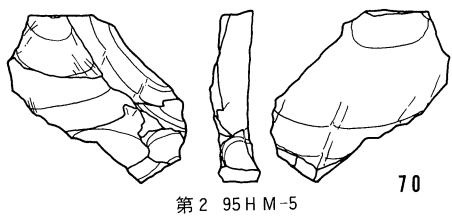
第 I 95HM-260 41



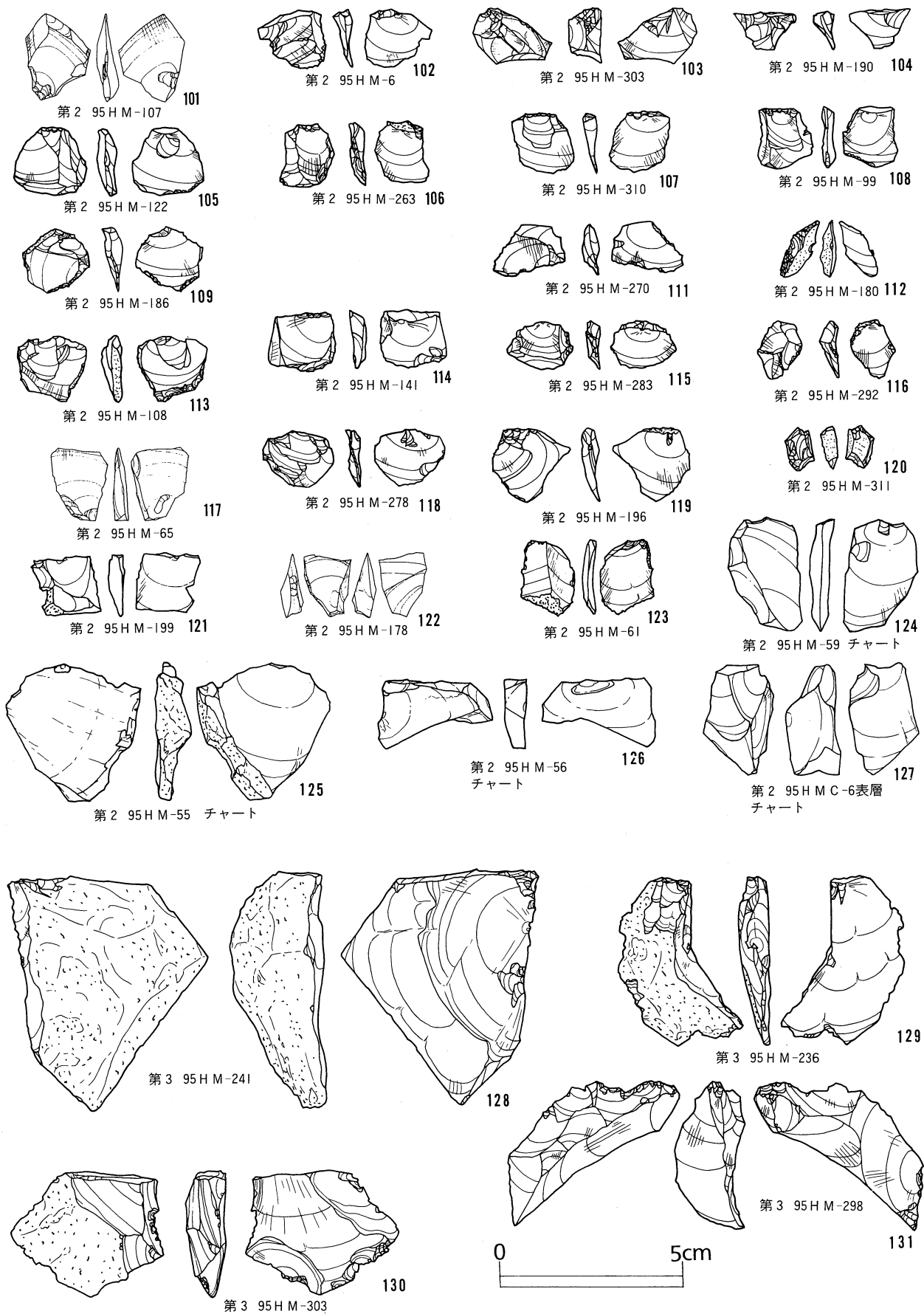
12图 出土石器 第 I 集中地点(2)



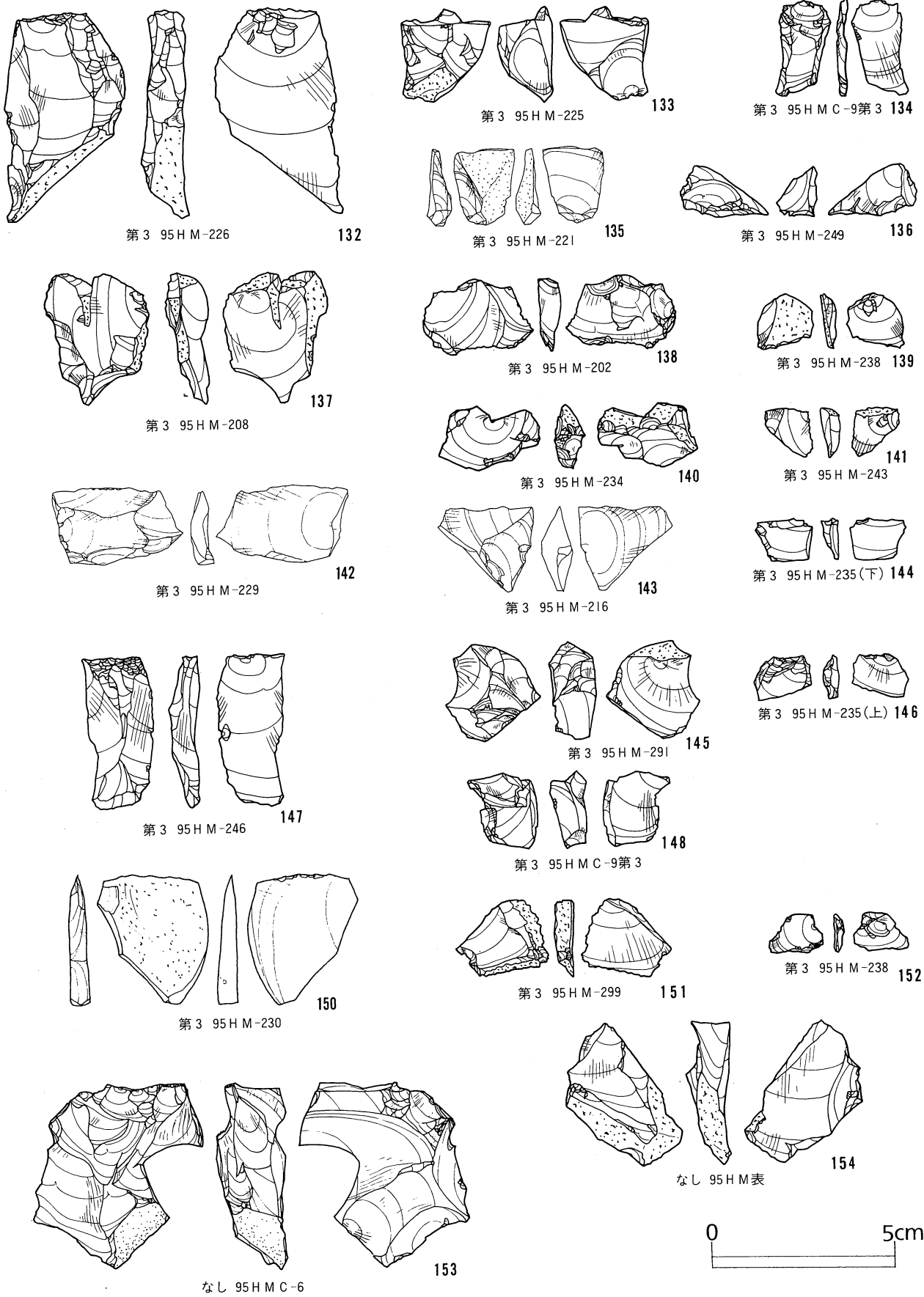
13图 出土石器 第 I 集中地点(3) 第 2 集中地点(1)



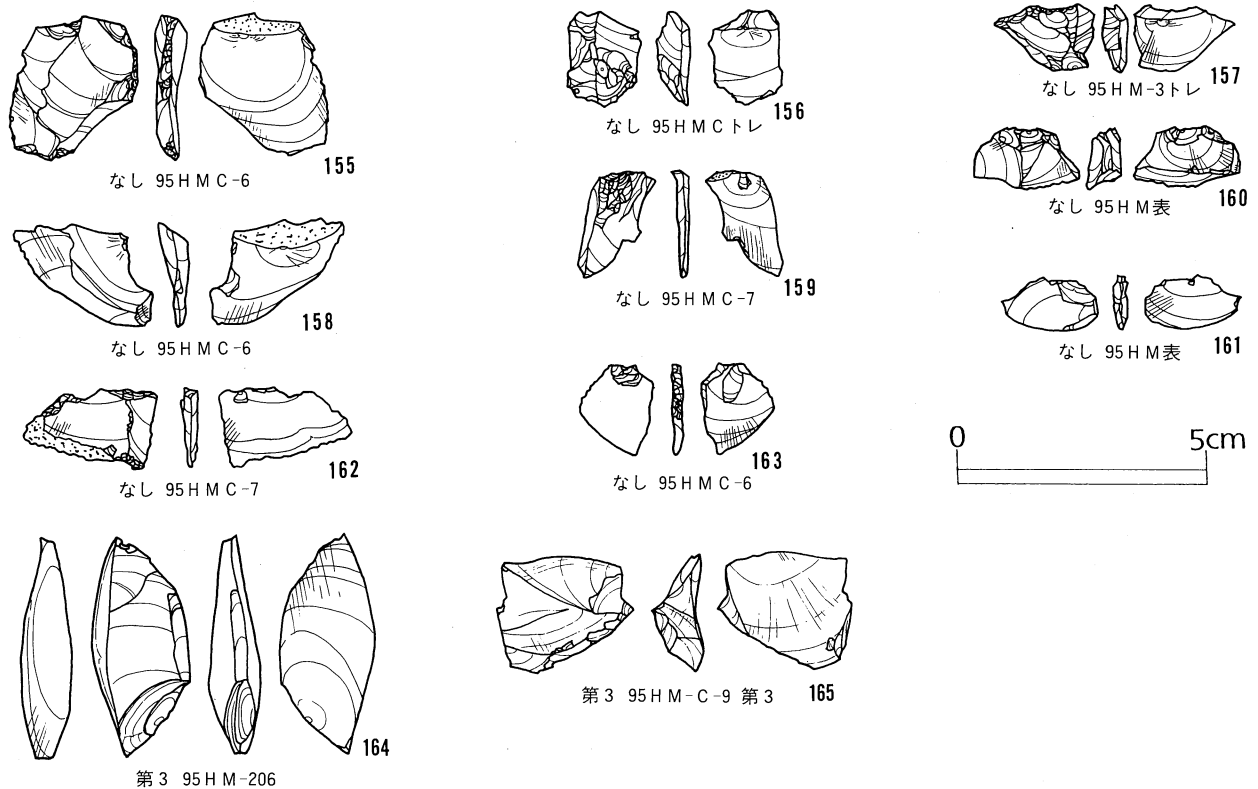
14图 出土石器 第2集中地点(2)



15図 出土石器 第2集中地点(3) 第3集中地点(1)



16図 出土石器 第3集中地点(2) グリット出土遺物



17図 出土石器グリット出土遺物

はなく、資料的な精度に危ういものがある。

とはいえ、それぞれの遺跡の石器群は限定された狭い地域のものでありながら、その様相を少しずつ異にしていることを重視したい。なぜならば、当該石器群の変遷を示めている可能性が高いと思われるからである。

本地域ではまず当該石器群の変遷課程を知ることが急務であると考えられる。そのためには複数の石器群を同時に分析することが必要である。幸い本地域では先述したように狭い範囲に複数の石器群が検出されている。

そこで、浜津ヶ池遺跡の石器群を単独で分析するよりも、これら限定された地域で発見された石器群を取り込んで、分析することにより、浜津ヶ池遺跡の石器群をはじめとする台形様石器群の変遷課程を知ることができるのではなかろうか。

第2節 石器の形態分類

形態分類は、浜津ヶ池遺跡（川上元・1960）、沢

田鍋土遺跡（中野市教育委員会・1987）、立ヶ花表遺跡、安源寺遺跡（長野県考古学会）を一つの石器群と考え共通なものとした。

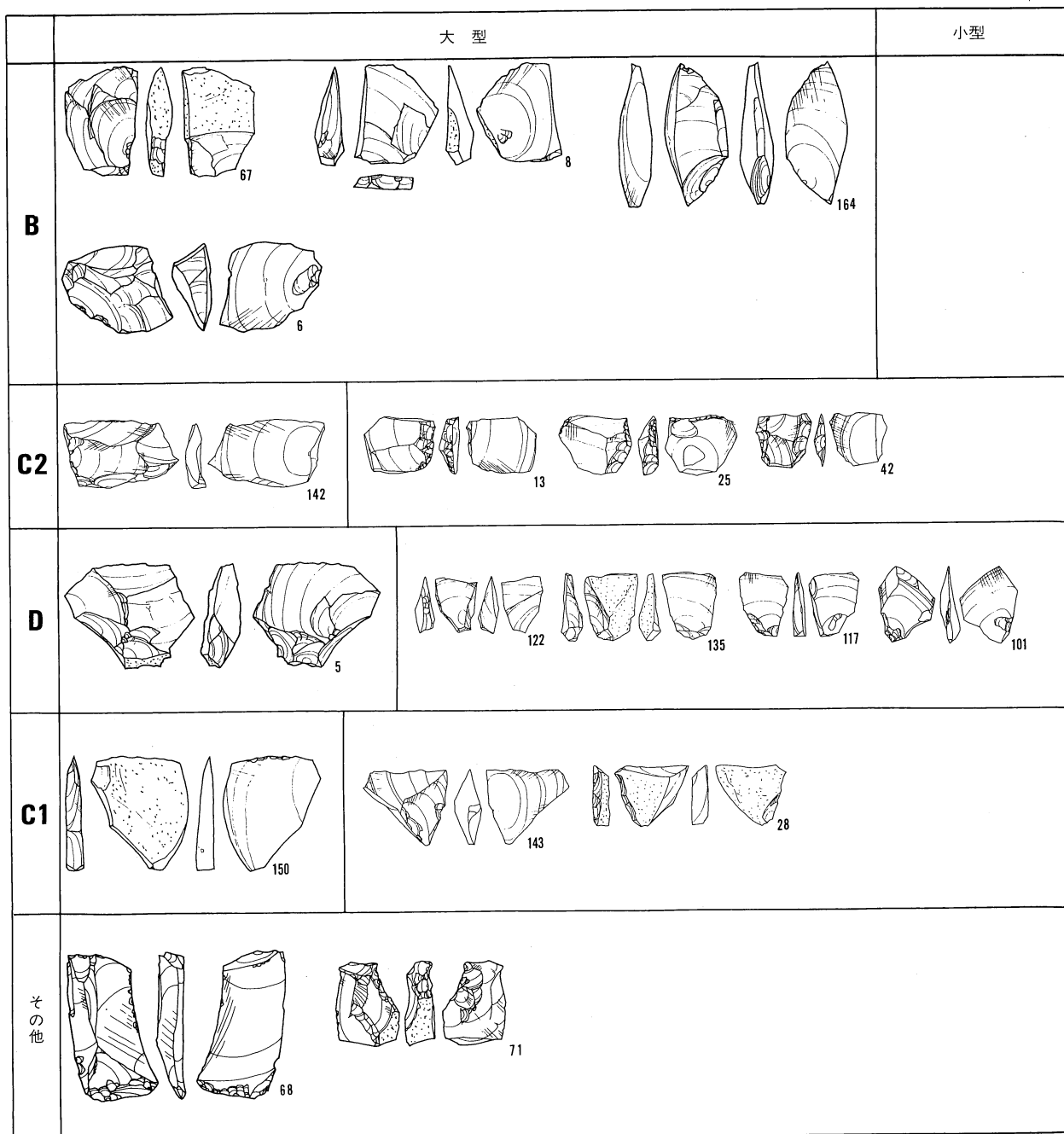
形態分類の基準の選択は極めて難しい問題ではあるが、本稿では刃部のあり方を基準とした。それは、石器の形態を決定する第一義的な属性は機能であると考えられるからである。そして、機能は刃部の形態とその運動に関ると考えるからである（第18図・19図）。

A類：石器の長軸に並行した比較的長い刃部をもつもの。調整加工の部位により細分した。

A1類：側縁に調整剥離が認められるもの。急角度の並列した小剥離による調整剥離が顕著である。

A2類：基部に調整剥離が認められるもの。基部方向からの平坦な調整剥離が顕著である。

B類：石器の長軸に対して、斜行する刃部をもつもの。基部とそれを挟む両側縁に調整剥離が認められる。調整剥離には平坦剥離や折



18図 浜津ヶ池遺跡石器分類

断が用いられている。

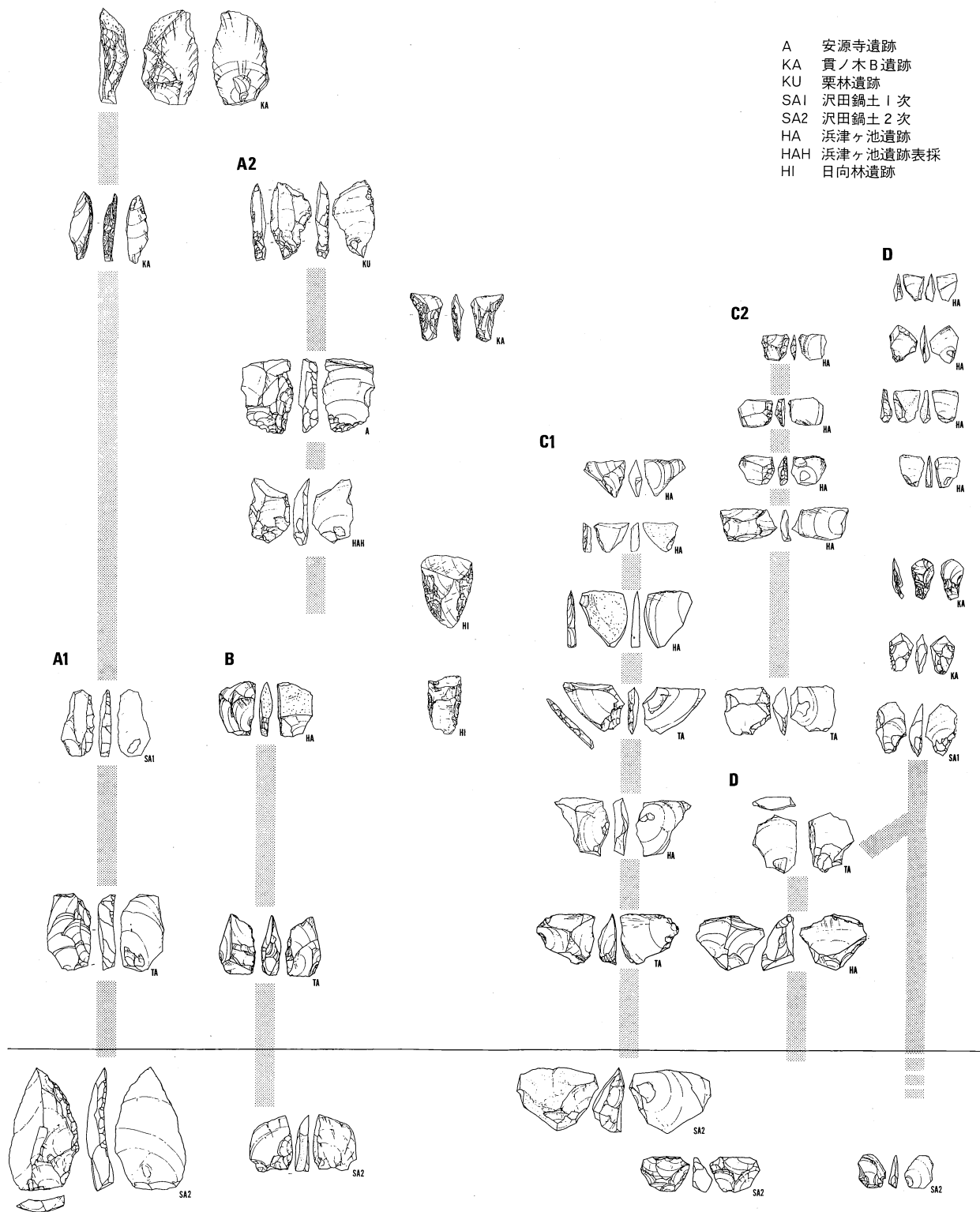
C類：石器の軸と刃部が直交するもの。平面形態により細分する。

C1類：全体の平面形態が三角形を呈するもの。調整剥離には平坦剥離、並列する急角度で小さな剥離、折断が認められる。他の形態の石器と比較して、並列する

小さな剥離が顕著である。

大型（C1L）と小型（C1S）の二者がある。

C2類：平面形が四角形を呈するものである。素材剥片の打面とその端部に調整剥離認められる。これにも大型（C2L）と小型（C2S）がある。



19図 石器の種類

D類：尖頭ないし丸みを帯びた刃部と狭い基部もつものである。基部の調整剥離に平坦剥離が多用される。大型（DL）と小型（DS）がある。

大型のものは基部調整が少なく、極端に厚いものがある。

第3節 素材剥片剥離

沢田鍋土遺跡遺跡、立ヶ花表遺跡、浜津ヶ池遺跡で残核が出土している。また、多くはないが剥片が接合したものが二例ある。これらの残核を3類に分類する。

1 第1類：縦長剥片が剥離されるもの。

（1）沢田鍋土遺跡遺跡出土例（第20図、第22図1）

残核に3片の剥片が接合した。No.7、20剥片は寸詰まりの縦長剥片、No.29剥片は左右の側片が非対称ではあるが、寸詰まりの縦長剥片と考えられよう。

頁岩の転石が利用されている。全体の形状ははっきりしないが、ほぼ拳大の偏平な亜角礫であったと考えられる。

石核の底辺の両側面に剥離が認められるが、残核を石器に転用したためのもと考えられる。

No.7剥片は表皮をはぐように剥離されている。後の剥離で頭部側の左半分が失われており、断定はできないが、残存する頭部には特に打面となるような剥離が観察されず、表皮を直に打面とした剥片と思われる。次に、No.20の剥片が接合している。この剥片が剥離される以前に、本剥片剥離の方向と直交する方向からの剥片剥離が行われている。

No.29剥片はNo.20の剥離方向に直交する方向から剥離される。前段階で同様な方向の剥片剥離が1、2回行われている。

接合した剥片などを観察すると、同打面から1～2回程度の剥片剥離が行われると打面を新たにできた剥離面に移し、同様に剥離する。これが何回か繰

り返されたものとする。結果的には、同一打角から1～2回の剥離を行い打面を90°移転することとなる。

剥離される剥片の形状は新たに剥片剥離作業面になった剥離面の幅に左右されよう。本例のように偏平な場合は、狭い面を作業面としたときに縦長の剥片が剥離される。

（2）浜津ヶ池遺跡出土例（第21図、第22図2）

拳大の黒曜石の転石が利用されている。現存する部分には石核調整剥離は認められない。

まず、打面と実測図の正面にあたる剥離面が剥離され、次に大型のNo.128剥片が分割されるように剥離される。剥離されたNo.128剥片からは「ポジーボジ」の剥片が一枚剥離されている。

次に、No.165剥片が剥離される。打面は石核の背面側にあり、接合したNo.142、132とは打面を共有していない。No.165は頭部に二次的な剥離があり、打面は残されていない。しかし、剥片の形状やリングからみて、石核の背面に届くような大きなものではない。

とすれば、No.165+147+132を含む、これよりやや大きめの剥片として、剥離された後に、No.165が剥離されたことになる。すなわち、石核から、No.128のような大きな盤状の剥片が剥離された後、この剥片を石核として、No.165やNo.147、No.132の剥片が剥離されたと考えられる。

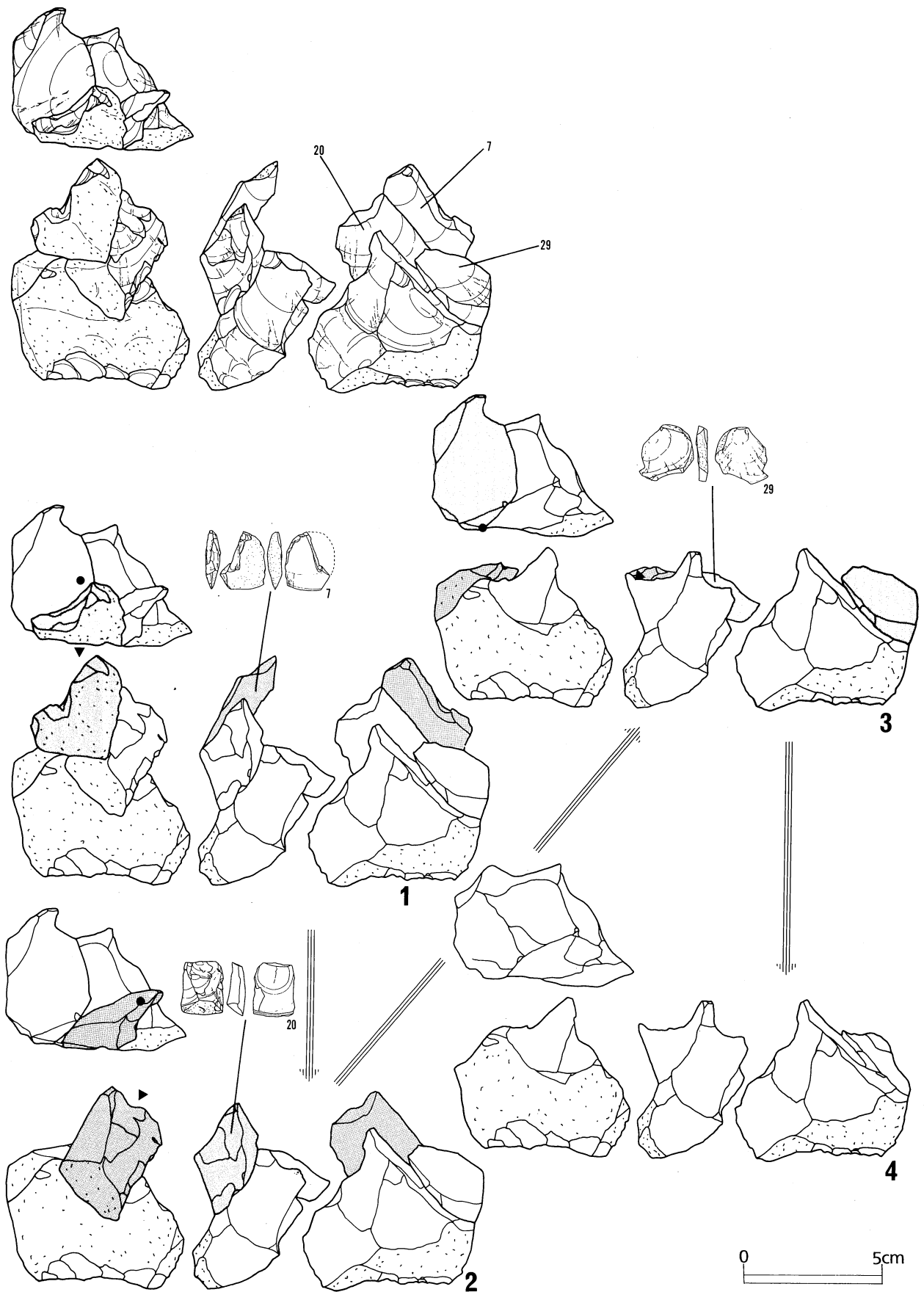
同様のことはNo.147とNo.132の剥片にもいえ、大きく剥離された後にNo.147が剥離された可能性も否定できない。

本例の剥片剥離は石核の外側から、徐々に内側に剥片剥離が進行するのではなく、石核が大きな剥片に一度分割され、分割された剥片が石核（第二次石核）となって剥片剥離が進められたと考えられる。

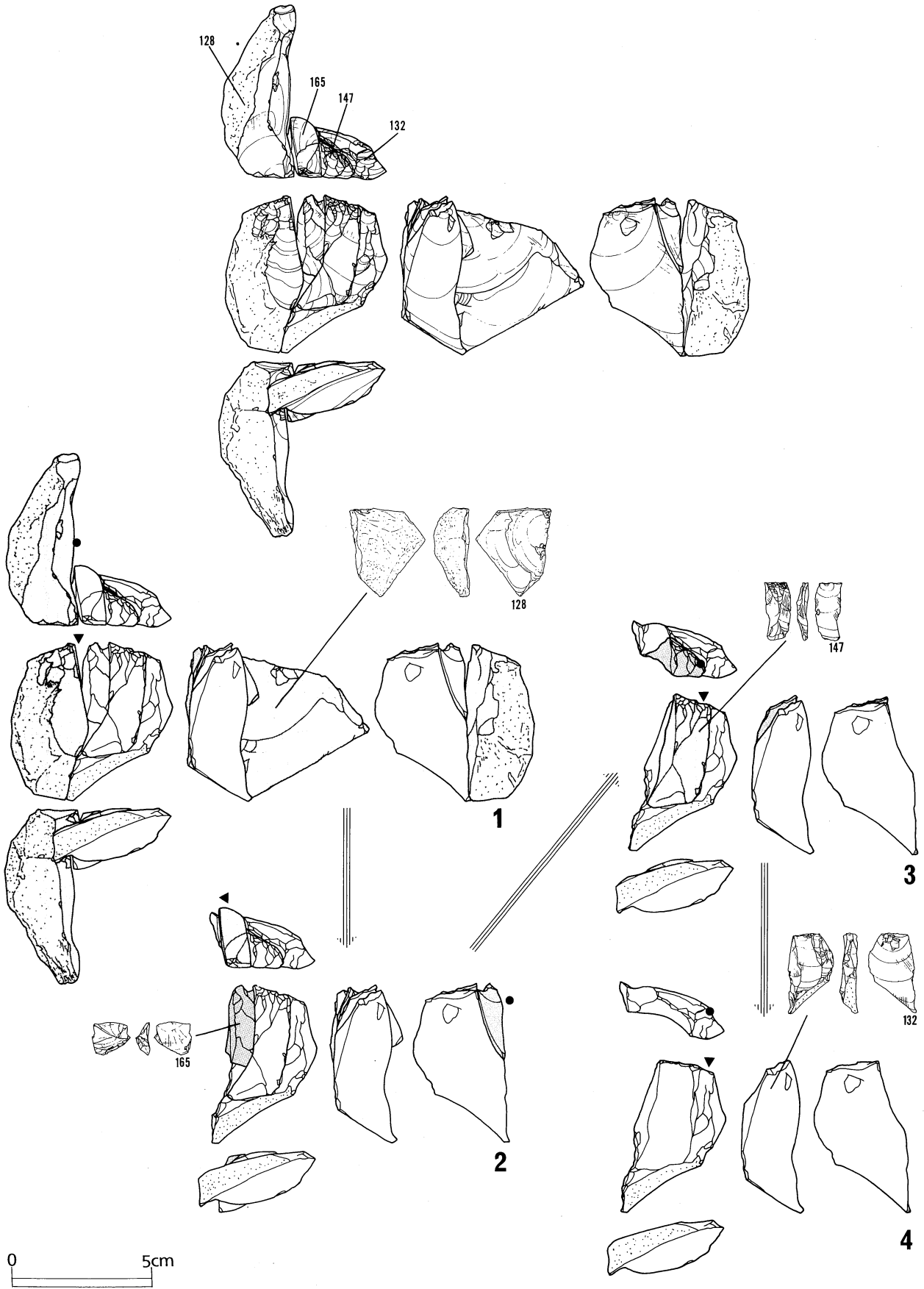
2 第2類：残核がプリズム状を呈するもの。

（1）沢田鍋土遺跡出土例（第22図3）

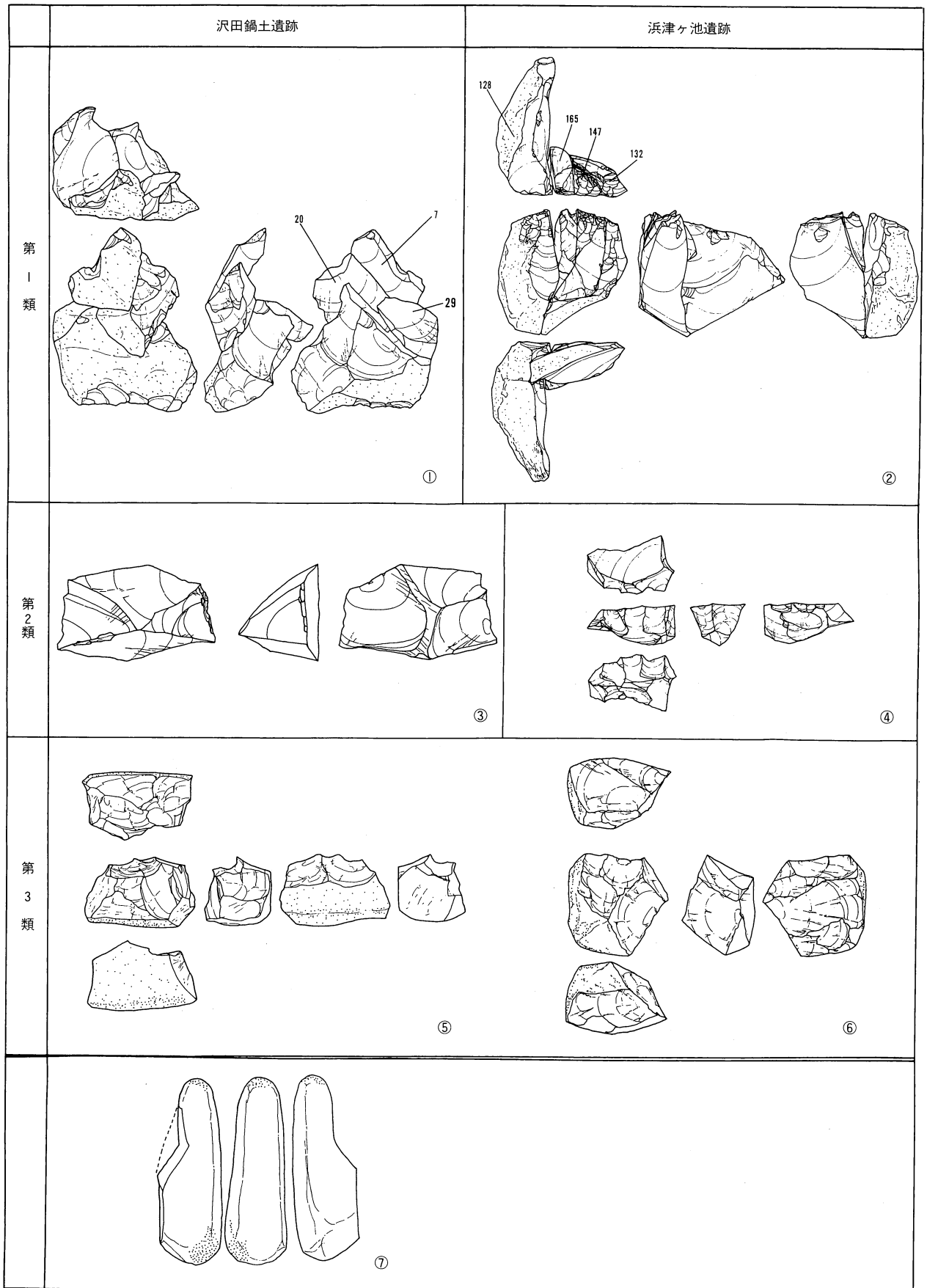
プリズム状の石核の腹面を剥片剥離作業面として、周囲から、貝殻状の剥片を剥離している。



20図 沢田鍋土遺跡石核接合例



21図 浜津ヶ池遺跡石核接合例



22図 石核の分類

(2) 浜津ヶ池遺跡出土例 (第22図4)

プリズム状の石核の腹面を打面として、両側面から剥片剥離が行われている。打面の移転は認められるが、打面を固定する傾向が強い。また剥片剥離角が急角度になっている。

3 第3類：残核が礫器状をなすもの。

沢田鍋土遺跡のみで検出されている。丁度、断面山形の礫器を製作するように剥片剥離を行う。5の例のように、両側面を剥片剥離作業面としているものと、6例は側面も剥片剥離作業面としている例がある。6は第1類の石核とも考えられるが、やや幅が大きいことから本類に含めた。

該当する石器群の保有する石核を3類に分類した。1類、2類の石核は沢田鍋土遺跡、浜津ヶ池遺跡に認められるが、やや様相が異なる部分を持つ。礫器状の残核となる3類の出土は沢田鍋土遺跡のみであり、黒曜石を主体とする他の石器群には認められない。

1類は縦長剥片を目途としたものと考えられているが、剥片の両側縁が平行することも目途の重要な部分を占めているのではなかろうか。

ところで、縦長剥片の剥離では、剥片剥離の作業面の形状(平坦か、山形に角度がついているか)が重要な要素となる。剥離角や、加撃の方法(ハード、ソフト、あるいはパンチのあるなし)も重要な要素であるが、まずは剥片剥離作業面の形状が大きな制約条件となる。

縦長剥片を剥離するには、はじめから、偏平な石核の狭い面を剥片剥離作業面として選択するか、綾がある部分を選択するか、あるいは綾をつくるといった手段が考えられる。石刃技法の大きな特徴は、作り出した剥離作業面の綾を保持しながら連続的に剥片が剥離されることにあると考える。

沢田鍋土遺跡例では剥片の背面に綾は顕著でなく、選択された打点の位置も剥片の背面に綾が形成される石核の角を選択していない。この剥片剥離過程で

は、石刃石核のように、剥片剥離作業面に角度を用意して縦長剥片剥離するのではなく、剥片剥離作業面の幅そのものを狭くして縦長剥片を剥離する手法が選択されているように考えられる。石核の原材となる転石もはじめから偏平なものが選択されたのではなかろうか。

浜津ヶ池遺跡例では偏平な転石は利用されていないが、剥片剥離はそこから分割されるように剥離された分厚い剥片(第二次石核)から行われている可能性がある。第二次石核の打面は狭く、打点もコーナーを選択しているようには見えない。ただ、打点の位置が打面の中央より左右につれ、剥片剥離作業面が打面の長軸に対して斜めになっている。石刃石核へ受け継げる要素とも考えられる。

このように、沢田鍋土遺跡、浜津ヶ池遺跡で検出された縦長剥片の剥離は偏平な石核から剥離されており、石刃技法に見られるような剥片剥離作業面の綾を利用していないと考えられる。

そして、沢田鍋土遺跡と浜津ヶ池遺跡の相違点は、沢田鍋土遺跡例は最初から偏平な転石を利用しているのに対して、浜津ヶ池遺跡例は転石を分割して偏平な石核にしていることをあげることができよう。また、浜津ヶ池遺跡例では打点の位置が左右につれ、打面の軸にたいして、剥離作業面が斜めになる点も注意される。

第2類は貝殻状の剥片が目途とされた石核である。沢田鍋土遺跡、浜津ヶ池遺跡には残核が検出されている。また、立ヶ花表遺跡には若干の剥片接合資料があり、剥片の剥離過程を推定できる。この例では打点は石核の周囲を移動するものの、打面を固定する傾向が強いものと思われる。

沢田鍋土遺跡例(第22図3)の素材の形状は明らかではないが、立ヶ花表遺跡、浜津ヶ池遺跡例は分厚い剥片が素材と思われる。沢田鍋土遺跡例は石核の周囲から剥片剥離が行われているのに対して、浜津ヶ池遺跡では打面の転移は行わるものの、打面を固定して複数回の剥片剥離が行われ、両者には相違点が認められる。

これらの石核の時間的前後関係はあきらかでないが、沢田鍋土遺跡から浜津ヶ池遺跡へという変遷を想定すると、第2類の石核には序々に打面を固定していく傾向を指摘することができよう。

第4節 形態の組み合わせ

石器は形態から、四類に大別した。これらの石器の組み合わせを検討しておこう（第23図）。

沢田鍋土遺跡では、分類に対応した石器形態は存在するが、その種類は少ない。

A類とした縦長の石器は黒曜石を主体とする他の石器群では、A1とA2に細分されるのだが、ここでは両者の特徴が併存しているように思える。

また、C類と石器の軸と刃部が直交する石器は全体に厚く、区別される。

D類と思われる石器もあるが、不安定な形態である。

立ヶ花表遺跡では、ほぼ全形態が出現しているが、全体に剥片が大振りである。また、全体的な印象としては調整剥離が荒いようにみえる。

沢田鍋土遺跡、安源寺遺跡では石器数が少なくその組み合わせを考えることはできないが、尖頭なし丸みを帯びた刃部をもち、小型の石器、D2類が伴っていることが特徴的である。

浜津ヶ池遺跡では石器は小型化が顕著である。また、形態分類ではD2類に含めたが、基部調整のある小型の石器が出現している。

第5節 まとめにかえて

これまで、見てきたように、それぞれの石器群の剥片剥離や石器形態は微妙に異なっている。敢えて、形態や剥離の技法をたよりに、これらの石器群をこれまで知られている石器群の変遷と対応させると、沢田鍋土遺跡→立ヶ花表遺跡→沢田鍋土遺跡・安源寺遺跡→浜津ヶ池遺跡という変遷過程が考えられる。ただし、信濃町周辺の遺跡などを考慮すると、この変遷の間に別の特徴をもったの石器群が存在すると考えたい。

遺跡名	石 器								石 核		
	A1	A2	B	C1	C2	D1	D2	第1類	第2類	第3類	
浜津ヶ池		●	●	●	● 小型	● 小型	● 小型	●	●	●	
安源寺		●					●	●	●		
沢田鍋土 第1次	●						●	●	●		
立ヶ花表	●		●	●	●	●				●	
沢 田	●		●	●	●	●		●	●	●	

23図 石器の組み合わせ



↑ 遺跡全景

↓ 層位





↑ 遺物出土状況

↓ 調査風景



浜津ヶ池遺跡発掘調査報告書

印 刷 平成 8 年 3 月 25 日
発 行 日 平成 8 年 3 月 25 日
編 集 ・ 発 行 中野市教育委員会
中野市三好町 1 - 3 - 19
印 刷 所 葛友印刷株式会社

